

## 子どもの声を集めようプロジェクトチームの取組 ～ アンケートを通して学びました ～

自分たちの担当する業務は、「子どもの声を集めるために、アンケートを実施するのだな。」と簡単に理解していたのですが、取組の中で子どもたちの声を「如何に聴いていなかったか」、「対等になって聴くことがどんなに難しいか」を学ぶこととなりました。

### ■ アンケートを組立てるための思考整理

アンケートのねらいとしては、まず、多くの子どもたちの回答を得て、一部ではない津市の子どもたち全体の状況や実態を掴み、そして、権利侵害をされている少数意見を共感・共有し、子どもたちの実情認識をもとに子どもの権利を保障し、主体的な自立に向けて、社会の仕組みとして何が必要かを考えたい、としました。

次に、アンケートで掴みたい子どもたちの状況として、今子どもたちは、「腹が立ったり、悔しかったりする感情を素直に出せない。また、出さない（逃げてしまうため、その感情が湧かない。）状況がある。」、「人との関係性の薄さ、関係を持つ経験の少なさから、傷つきたくないために、相手とぶつかり合わない。意見を否定するのが嫌。自分の気持ちに踏み込まれるのが嫌。」、家庭・学校など生活環境面では、「ちゃんとする・普通にするという基準を押しつけられて良い子でいようとする。」、「比較・競争の中で不安、孤独、怒りがある。」等ではないかと推測しました。

これらを基に、アンケートの柱を、自己認知（自分をどうとらえるのか）、他者認知（子どもから見た人との関係性）、自己開示と他者受容（意見、気持ちがありのまま出せ、他者に受け入れられるか）、安心と不安（なにに対してそう思うのか）として、チーム整理としての方向性とし、市民委員会で議論しました。

### ■ 視点の再構築

市民委員会では、「否定的な子どもの状況を調査するようである。」、「意見が言えなかったり、傷つきたくないで逃避したりするのは、その子どもの問題でなく、そうさせてきた環境、周囲の大人の問題ではないのか。」、「周囲から子どもの内面、周囲からの関係性、不安要因の調査を行う感じである。」という意見が出されました。また、「子どもの権利条例につなげていくためには、アンケートの柱は、子どもの権利条約に掲げる4つの権利である『生きる・守られる・育つ・参加する』で考えた方が良い。」との提案もありました。

チーム員は、これまで子ども支援に関わってきて、子どもの権利条例のことも学んできた自信が少しはあったのに、全く分かってなったことに愕然としました。

そして、視点と調査項目を再構築するために、4つの権利と、「自分、まわりの人、地域・社会」との関係でマトリックスを作成しました。



日頃、活動を異にするチーム員は、子どもへの関わり方に違いがあり、それぞれの実感を基に、どんな子どもたちの状況があるのか、子ども自身が自分に対し、周囲の友だちや大人に対し、また地域や社会にどんな気持ち、訴えがあるのだろうかを推測しました。

アンケートの設問の言葉づかい一つひとつも、市民委員会でずいぶん揉んで、その度に、チーム員は、子どもの権利に対する理解の浅さを痛感し、心折れそうになりながら、「このことで、市民委員会全体で学ぶ機会になっているんだ。」と考え、取組んできました。

最終的にマトリックスには、きれいに当てはまらない設問もありますが、こうして、学び合いながら、アンケートの設問が完成しました。(調査票は資料)

	子ども	まわり	地域・社会
いのち-生きる 安心して守られる	●あなたは自分の気持ちを聴いてくれる人がいますか？	●あなたは自分のことが大切にされていると思いますか？	●あなたは地域・社会から守られていると感じますか？ ●あなたは安心して生活していますか？
自己肯定	●あなたは自分のことが好きですか？ ●あなたは自分に自信がありますか？		●あなたは安心できる場所がありますか？
育つ (力をつける)	●あなたは自分のことを自分自身で決めていますか？	●あなたには見守り、応援してくれる人はいますか？	●自分に関わることを、周りの人と一緒に決めていく場がありますか？
参加	●あなたは自分の意見が言える場がありますか？	●あなたの意見や考えが尊重されていると思いますか？	

## ■ アンケート調査の実施、回収、入力

子どもたちが気持ちを安心して出せるようにと、秘密を守るということに最大限配慮し、一人ひとり個封筒に入れるようにし、友だちにも、先生にも見られないことを保障するように努めました。

そして、出来る限りたくさんの子どもたちの声を生かしたいという思いで、対象の抽出は行わず、小中学校の校長会で全校にお願いし、また、市内の全ての高校、特別支援学校へは、市民委員会のメンバーが、学校を直接訪問し協力をお願いし、その数は全 88 校、21,053 人になりました。また、調査票の配布、回収を市民委員会のメンバーが手分けをして行い、さらに、目標の 2 倍の数になったアンケートの入力作業は、市民委員会のメンバーだけでなく、参画団体から協力者を呼びかけてもらい、のべ 286 人、1,922 時間をかけて行いました。

このことは、単に作業が大変だったのではなく、多くの人が学校に依頼に伺い、子どもの条例づくりの熱意を伝え、アンケート入力では、1 枚 1 枚に込められた子どもの気持ち、訴え、心の叫びを、文字の大きさ・強さ、自由記述の内容等から感じ取り、実感を得たことに、大きな意味があったと思っています。

アンケートづくり、実施を通じて、子どもたちの気持ち、訴えに触れ、ハッと気づく瞬間が何度もあり、また、自分たちが感じたこと（特に、大人のおごり、決めつけ等）を通して市民委員会の皆さんと、子どもの権利に立脚して、様々なことを一緒に考えることができ、子どもに向かう大人がどんどん変わっていくことを体感したのです。